『くちぶえ番長』を読んで

弘前市立大成小学校
立田悠月

（このチョンマゲ頭でに王立ちしている女の子が番長か。一体どんな女の子なんだろう?）と、この本の表紙の女の子に心が引かれてこの本を読むことにした。読んでいくうちに、この「番長」のマコトのぶっきらぼうな行動が読めば読むほど心地良くなってきて、この本は私の大好きな本の一冊になった。

主人公は、気が弱い小学四年生のツヨシと、そのクラスに転校して来たくちぶえと一輪車が上手なマコト。ツヨシは、いじめられている子を見てもそおっと逃げてしまうタイプ。一方のマコトは、転校してきた日の自己紹介で、この学校の番長になると言って、いじめられている子を絶対に助けようとどんどん行動するタイプ。放課後には、いじめっ子達が行きそうな所をパトロールまでする、芯の強い女の子。私もすぐに行動するタイプだけど、マコトにはかなわない。この本は、またマコトが転校するまでの一年間に、デコボココンビが、おたがいの気持ちを少しずつ分かり合っていくドキドキハラハラの話だ。

ある日、マコト達のクラスでクリスマス会があって、クラス全員でプレゼント交かんをした。きせき的にマコトとツヨシはおたがいのプレゼントが当たった。ふつう、プレゼント交かんの時はみんなが喜ぶ物を選ぶと思う。しかし、マコトはおもちゃのヘビ、そして、ツヨシはカラフルな輪ゴムをプレゼントに選んだのだ。もし私にそんな物が当たったら、「誰?こんな変なの持ってきたのは!」と怒るだろう。他の人もそうだと思う。しかし、二人はおたがいのプレゼントを見たとたんにおなかをかかえて涙を流して大笑いした。私は、この二人の楽しそうな姿が目にうかんできて、私まで笑ってしまった。同時に、この二人がとてもうらやましくなった。そして、良いプレゼントとは、もらってうれしい物だけではないとハッと思った。きっと、心が通い合っていれば、ちょっとしたいたずらのプレゼントも許せるし、それを一緒に楽しめるからではないだろうか。

重松清著『くちぶえ番長』新潮社

私のクラスの仲の良い男の子がこの夏休みに転校することになった。私は他の友達と一緒にプレゼントをあげることにした。最初は、喜んでもらいたくて、福が来るというつるを折り紙で心をこめて折った。その時、ふとマコトを思い出した。そして、その男の子とは何も関係がない手りけんもたくさん折ってプレゼントした。にっこりと笑ってくれた。成功だ。心が通じたようで、私もにっこりした。

マコトの番長としての行動が私にとって心地良いのは、ぶっきらぼうだけどやさしさがこもっていると分かって、それが素敵で友達になりたくなったからだと思う。私も、やさしさがある行動を心がけたい。そして、やさしさがある行動を理解し合って、心が通じ合う、許し合える友達をたくさん作りたい。